
書 評・紹 介

Jennifer, Lee and Min Zhou

The Asian American Achievement Paradox

Russell Sage Foundation, 2015, 268p

本書はアメリカを代表する移民研究者である UCLA の Min Zhou と UC Irvine の Jennifer Lee によるアジア系アメリカ人第二世代の教育達成に関する著作である。アジア系アメリカ人の第二世代(1.5世代も含む)はその高い教育達成によって、モデルマイノリティと呼ばれることも多いものの、その親世代の教育達成や社会経済的地位は必ずしも高くない。本書はこのように親世代の属性の多様性にも関わらず、アジア系アメリカ人の子どもたちの教育達成がおしなべて高いという矛盾した結果(the Asian American Paradox)がどのようにして生じるのかを特にアメリカに暮らす中国系、及びベトナム系第二世代を対象に明らかにしたものである。

本書はロサンゼルス近郊で行われた Immigration and Intergenerational Mobility in Metropolitan Los Angeles (IIMMLA) からランダムに選ばれた82人の中国系、及びベトナム系第1.5-2代、56人のメキシコ系第1.5-2世代、及び24人の第三世代以降のネイティブホワイト、及びブラックに対するロングインタビューに基づいたものである。

その結果明らかになったことは以下の通りである。

多くの場合、このような人種・民族集団間の教育達成、及び社会経済的地位達成の違いは文化の違いによって説明されることが多い。実際、当事者レベルでもアジアの教育を重視する文化が自分たちの教育達成のカギとなっていたとの発言は多く見られた。

しかしながら、こうした文化本質主義とでも言うべき説明はアジア系アメリカ人の中でも低い教育達成や社会経済的地位達成しか示さないグループもいることや、出身国の進学率は必ずしも高くないことや、ひいては米国以外の地域にいる同国出身者が必ずしもホスト社会で高い教育達成や社会経済的地位達成をしていないことを説明できないとする。

こうした中、本書が目にするのは米国に居住する中国系、及びベトナム系人口の多くが出身国に残っている人々と比べて非常に高い学歴や社会経済的地位を示しているという事実である。この hyper-selectivity は彼女／彼らが子どもの教育を相対的に重視する態度を持つことにつながると同時に、高い学歴を身につけることやその結果として社会的威信や収入の高い代表的職業(法律、医学、エンジニアリング、科学に関わる専門職)に就くことを唯一の成功と定義する相対的に狭い成功観(success frame)を持つことを帰結するとする。また、これらの集団はそういった成功観を達成するための民族資本(ethnic capital)を備えることで、親の学歴や必ずしも高くなくてもそういった競争に参入することが可能になるとする。更にこうした狭い成功観はモデルマイノリティとしてのステロタイプが流布することによって、当事者や教師などの間で再強化され、維持されることとなる。

なお、こういった hyper-selectivity を生み出したのは1965年移民法の改正であるとする。同改正においてはそれまで設けられていた国、地域別のキャップが取り除かれたことから、欧州以外の地域からの移民の流入を可能にした。その際の移民の選別基準の一つが学歴を始めとした人的資本であり、そのことが結果としてアジア系アメリカ人の hyper-selectivity を生み出したとされる。

このようなステレオタイプはアジア系に対する良いイメージを通じて本人たちを利する一方

(stereotype promise), 彼／彼女らに別の心理的コストを生じさせることも示されている。また、それはアジアと米国間の能力観の違いからより際だったものになるとされる。アジア諸国では専ら子どもの教育達成は本人の努力によるところであるとの認識が強い一方、米国ではこれは子どもの持って生まれた能力の差であると捉える向きが強い。アジア系の子どもたちは家庭ではこのような価値観に基づいて、より高いゴールを目指すことを要求される(an A- is an Asian fail (F)) 一方、学校では米国の価値観に基づき、その高い成績は持って生まれた能力の反映と捉えられがちである。

こうした矛盾した価値観に囲まれた中では、子どもたちは無限に目標を上げる圧力を家庭から受ける一方、その学校における評価に当たっては努力の量ではなく、結果主義的にならざるを得ない。そのため、アジア系第1.5-2世代はわずかなものであっても失敗した場合に挫折しやすく、また仮に客観的には高いパフォーマンスを示す場合でもその自尊心が非常に低い傾向にあるとされる。

こうした分析結果は本書が従来の移民研究のように、非ヒスパニック系ホワイトを階層達成のベンチマークとするのではなく、ロングインタビューによって本人たちの主観に寄り添ったアプローチ(the subject-centered approach)を採用していることが大きい。これは例えば、移民第二世代の教育達成に関する代表的な理論的枠組みである「分節化した同化理論」(segmented assimilation theory)が主に客観的な指標に基づいて第二世代の上昇、下降同化を論じたのとは対照的であるとされる。

本書はこれまで底辺層への下降同化を中心に行われてきた移民第二代研究において、一見して高いパフォーマンスを示しているとされるアジア系アメリカ人第1.5-2世代の教育達成の要因とその帰結を明らかにした点でユニークであり、現在、移民第二世代の教育達成の課題を抱えつつある日本社会においても非常に有益な視点を示すものである。また、量的な大規模調査からインタビュー対象者をランダムに選び出し研究を進める方法は、本人たちの主観に寄り添ったアプローチ(the subject-centered approach)を採用しつつ、それを同時に客観的な指標によっても同時に検証できることから、今後、日本において同様の研究を進める上でも非常に参考になるだろう。(是川 夕)